

1. 生涯学習教育研究センターは30周年を迎えました

<生涯学習教育研究センター30年のあゆみ>

本年4月、生涯学習教育研究センターは、その前身である大学教育開放センター誕生から数えて満30歳となりました。昭和53(1978)年4月、大学開放を専門的に扱うセンターとしては全国の国立大学の中で3番目に設立されたセンターです。当時の新聞記事からは、地域社会から大きな期待を集めつつ誕生したことが伺えます。ちなみに、故・福田赳夫氏が内閣総理大臣を務めていた頃のことです。

平成3(1991)年には名称を生涯学習教育研究センターと変更し、平成12(2000)年には経済学部構内から研究交流棟6階へと移転しました。

現在、30年間に実施された全ての公開講座等のデータを含む『香川大学生涯学習教育研究センター30年のあゆみ』を編纂しているところです。

<大正時代から実施している公開講座>

ところで、本学の公開講座はいつ頃始まったか、ご存知ですか？

公開講座それ自体は、当センターが誕生した30年前に始まったものではありません。各学部(当時は教育学部、経済学部、農学部)でそれぞれ実施していた公開講座(当時は開放講座)を、より一層拡充することを目的に当センターが誕生したのであって、30年以上前から地域住民向けに講座は行われていました。

では、本学が正規の学生以外に講座を行うようになったのは一体いつ頃からでしょうか？今回、『30年のあゆみ』編纂にあたって、本学における公開講座の歴史を調べてみたところ、なんと、大正14(1925)年7月にまで遡ることができることが判明したのです！もちろん、当時は香川大学ではなく、経済学部・法学部の前身である高松高等商業学校の時代。高松高商の授業開始が大正13(1924)年4月ですから、学校の設立ほどなくして対外的な事業も開始されたということです。(左は昭和4年のチラシ。戦前は「成人教育講座」という名称で実施されていました。)

更に驚いたのは、高松高商は、東京帝国大学(現・東京大学)や小樽高等商業学校(現・小樽商科大学)に匹敵するほどの規模で開放事業を行っていた高等教育機関だということです。今でこそ公開講座は全国各地で行われていますが、戦前においては稀有な事例であり、誇るべきことと思われれます。戦後、昭和24(1949)年に新制香川大学が発足しますが、その年の9月には経済学部が早々に「専門講座」を実施しています。そして、その後徐々に他学部にも広がっていったという次第です。

本学の生涯学習教育研究センターが、全国的に見て最も初期の頃に設立されたのも、歴史を振り返ってみると至極当然のことと言えるのではないのでしょうか。

公開講座のような開放事業は、教育・研究に次ぐ「第3の機能」と言われることが多く、大学教職員にとっては比較的新しい職務と考えられがちですが、本学では実は設立当初から実施されてきた伝統があることを忘れてはならないと思います。

<30周年記念講演会・シンポジウムのお知らせ>

さて、2008年9月25日(木)には、高松市生涯学習センターまなびCAN多目的ホールにて、30周年記念講演会・シンポジウムも開催されます。詳細は以下の通りです。多くの方のご参加をお待ちしております。

香川大学生涯学習教育研究センター30周年記念講演会 & シンポジウム 知の循環型社会の構築に向けた香川大学の取り組み ～生涯学習を通じた社会貢献～

日時:2008年9月25日(木) 13:30-16:00

会場:高松市生涯学習センターまなびCAN

定員:200名(無料、但しセンターへ事前申し込み)

後援:香川県教育委員会、高松市教育委員会

記念講演「シェイクスピアとともに歩む」(香川大学名誉教授・稲富健一郎) 他



2. 参加型学習への誘い～センター担当教員の研究・実践紹介(6)～

②対象に合わせた参加型学習の用い方

参加型学習は対象によって異なった表情を示します。自然・社会・生活体験のいずれも少ない若者は、周辺世界の理解の仕方が私たちとは異なっています。若者の周りにも大人と同じ情報が飛び交っていますが、そこにはコンテキスト(文脈)が欠ける場合が多いようです。直接体験をとまなわれない知識は薄っぺらいものであって、五感で感じたような統合的な認識ではありません。それに対して、直接体験をとまなう知識は、色や形、臭い、温度、周囲の環境、光、音、感触等さまざまな情報と結びついて獲得されています。この結びつきがコンテキストであって、知識の背後にあるコンテキストが、豊かな想像性や創造性を育むことにつながりますし、言語の内面化や定着に結実します。

また学校等では多くの場合、学ぶ側(生徒・学生)に、教える側(教師)の目指すゴールを見せずに教育活動が展開され、学ぶ側がそれに気づいていくようあらゆる手段を駆使するところに特徴があります。逆に、学ぶ側にゴールや見通しを先に説明しても、経験のない彼らは言葉を理解したとしても、意味のまとまりとしては伝わりません。ゴール地点に到達した後に、プロセスを振り返ることでしかゴールの意味がわからないのです。体験を取り巻く環境が様変わりした中で、今必要とされている体験は直接体験です。学習支援方法も経験を体系化するに相応しい方法論を開発し、できるだけ本物に触れる学習機会の提供や学習情報提供を行っていく必要があるようです。



それに対し、学習者がさまざまな体験を豊富にもつ成人である場合、あらかじめセッションのゴールイメージを伝えておく方が有効のようです。貴重な時間を割いて学習に参加しているわけですから、学習の意義や見通しを理解している方が学習に身が入ります。ゴールイメージを伝えることは一見教育的でないように感じられるかも知れませんが、成人学習者は学習成果が必ずしも課題解決に即応するわけではないことも知っています。学習プロセスでの気づきや関係づくりの方が結果的に有効であることも体験的に理解しています。成人学習者を信頼するということが参加型学習を行うときに大切なようです。

— * — * — * —

さて、参加型学習について2007年3月より本欄でご紹介してきましたが、9月4日(木)13:30-15:00には大学教育開発センター主催FDスキルアップ講座で「授業実践へのワークショップの効果的な活用法」を行うことになりました。ご関心のある方は是非ご参加頂きたいです。(文責:清國祐二)

3. ホームページがリニューアルしました

本年4月にセンターのホームページがリニューアルしました。リニューアルに伴い、今年度の実験的試みとして、音声による公開講座の紹介番組「今湧き上がる知の泉」を月一回のペースで更新しています。公開講座の実施教員とセンター担当教員・山本との対談形式で、それぞれの公開講座の趣旨や具体的内容を紹介しています。

トップページからお聴きになれますので、ぜひお聴き下さい。

<今湧き上がる知の泉>

- 第1回 当センター長・清國祐二 「センター長挨拶」(10分)
- 第2回 名誉教授・稲富健一郎 「シェイクスピア講座の魅力」(前編:7分、後編:11分半)
- 第3回 農学部准教授・安井行雄 「昆虫を通して環境変化を知る」(10分)
- 第4回 教育学部教授・野崎武司 「ボール運動は子どもの心と体を鍛える」(8分半)・・・以上公開済
- 第5回 工学部教授・岡野真 「神社、それは研究者に残された宝の山」(10分)・・・8月中旬公開(以後、来年3月まで月一回更新予定)

センター雑感

本文にも書きましたとおり、ここ数ヶ月間、当センター30年分のデータと格闘していました。公開講座のアルバム写真だけでも膨大な量です。その中から写真を厳選するのもし仕事！もっとも、それだけ当センターが多くの受講生そして教職員の方々に支えられてきたことの証です。そして、今回の作業によって、本学における公開講座の歴史が予想以上に長いことも知ることができました。この伝統を次の10年、20年に繋げていくことが今後の課題です。(山本)

バックナンバーは下記のWebサイトに掲載されています。是非ご覧下さい。

Tel. 087-832-1273 Fax. 087-832-1275 URL. <http://www.kagawa-u.ac.jp/lifelong/> Email. syogse@ao.kagawa-u.ac.jp

1. 生涯学習教育研究センター30周年記念行事について(報告)

<①30周年記念誌『三十年のあゆみ』の刊行>

1978(昭和53)年4月、香川大学生涯学習教育研究センターの前身である大学教育開放センターが設立され、今年30周年を迎えることができました。

30周年を記念して、当センター担当教員、公開講座担当教員、公開講座受講生の方々のセンターにまつわる思い出や、30年間の公開講座をはじめとする当センターの事業をまとめた『三十年のあゆみ』を刊行しました。



<②30周年記念講演会&シンポジウムの開催>

2008(平成20)年9月25日(木)には、高松市生涯学習センターにて、30周年記念講演会&シンポジウムが開催されました。

第一部の講演会では、1985(昭和60)年以来連続24年間、当センター公開講座をご担当下さっている稲富健一郎名誉教授(英文学)の「シェイクスピアとともに歩む～公開講座を振り返って～」と、山本珠美センター准教授(生涯学習論)の「公開講座の源流を探る」の2つの講演を通して、公開講座および当センターの過去を振り返りました。

第二部では、「知の循環型社会の構築に向けた香川大学の取り組み～生涯学習を通じた社会貢献～」と題したシンポジウムを行い、清國祐二センター長のコーディネートの下、浅野秀重金沢大学地域連携推進センター教授、稲富健一郎名誉教授、阿部文雄理事の3名のシンポジストがそれぞれの意見を交わしました。



2. 第30回全国国立大学生涯学習系センター研究協議会(報告)

去る、10月23日(木)および24日(金)の両日にわたり、第30回全国国立大学生涯学習系センター研究協議会(幹事校:大阪教育大学)が開催されました。本学からは、清國祐二センター長と山本珠美准教授が出席しました。なお、研究協議に係るプログラムは以下の通りです。

記念講演	「大学公開講座をとりまく現状と今後について」 文部科学省生涯学習政策局生涯学習推進課 専門官 竹田 和彦 氏
全体会	(報告)第29回以降の経過報告について (提案)規約等の改正について
分科会	(第一分科会)「公開講座の企画と内容に関する交流と分析」 (第二分科会)「大学における生涯学習事業の意義から考えるセンターの将来展望」
全体会	(一部)分科会報告および関連する協議 (二部)大学を越えたセンター間共同研究の具体化について

文部科学省の担当官より、公開講座等の現状報告を受け、今後の高等教育政策の中で公開講座等の展開に期待されることについて講演をいただきました。全体会での1年間の活動報告等の後、第一分科会では公開講座のあり方について鹿児島大学による基調報告に基づき協議を行い、第二分科会では生涯学習事業の意義とセンターの将来展望について香川大学による基調報告に基づき協議を行いました。

結論的には、大学の地域・社会貢献を「第三の機能」あるいは「付加機能」とすることから脱皮し、大学の有する当然の機能とする意識を広げていかなければならないことが確認されました。最後には、香川大学より提案した共同研究(各大学の大学開放の歴史研究)に多くの賛同が得られ、今後の共同研究に明るい展望が開けて閉会しました。



3. 平成21年度公開講座の募集開始について

12月初旬から来年度の公開講座の募集を始めます。平成21年度の「公開講座実施要領」および「計画書」につきましては、改めてメール等でご連絡しますが、開講ご希望の方は、平成21年1月19日(月)までに、センター事務室までご連絡下さい。多くの方の意欲的な講座の提案をお待ちしております。

申込先: センター事務室 内線1273 syogse@ao.kagawa-u.ac.jp
問合せ先: センター長 清國祐二 内線1272 kiyokuni@cc.kagawa-u.ac.jp

4. 『香川大学生涯学習教育研究センター研究報告第14号』投稿募集

当センターでは毎年度『香川大学生涯学習教育研究センター研究報告』を発行しております。生涯学習を研究する本学教員、センターが主催する講座等を担当した本学教員、また、センターが主催する講座等を担当した学外講師で編集委員会が認めた者であれば、どなたでも投稿することができます。

投稿ご希望の方は、所属、氏名、論文仮タイトルを平成20年12月19日(金)までにセンター事務室または下記担当教員までご連絡下さい。原稿締切は平成21年2月2日(月)です。

なお、投稿規定等の詳細につきましては、上記公開講座募集とあわせて12月初旬頃にメールにてご連絡します。多くの方のご投稿をお待ちしております。(掲載された論文は電子化を行い、センターHPに公開されます。)

申込先: センター事務室 内線1273 syogse@ao.kagawa-u.ac.jp
問合せ先: センター担当教員 山本珠美 内線1271 yamamoto@cc.kagawa-u.ac.jp

<参考:2007年度第13号掲載論文>

ヤーコプ・ブルクハルトの公開講義	中谷博幸(教育学部)
大正時代のナショナリスト上杉慎吉について	ノイマン、フロリアン(大教センター)
高度情報社会における子育て支援の新しい試みとその検証(3) ～携帯子育て掲示板の運用指針についての検討～	清國祐二(生涯センター)
香川大学教育学部生によるラジオ番組制作 ～文部科学省現代GP「実践的総合キャリア教育の推進」の取組として～	山本珠美(生涯センター)

センター雑感

一年経つのが年々早く感じます。今年は『源氏物語』千年紀、過去何度かチャレンジしては挫折していた源氏を、今年こそ「桐壺から夢浮橋まで、54帖読み通す！」と決心したはずでした。しかし、他にも読みたい本がたくさんあって、、、というのは単なる言い訳、文庫本でたった3冊なのに、なかなか先に進むことができません。もう11月だというのに、源氏はまだ元気です。本当に年末までに読み終わることはできるのでしょうか!?(山本)

バックナンバーは下記のWebサイトに掲載されています。是非ご覧下さい。

Tel. 087-832-1273 Fax. 087-832-1275 URL. <http://www.kagawa-u.ac.jp/lifelong/> Email. syogse@ao.kagawa-u.ac.jp

1. 大学開放の歴史～センター担当教員の研究・実践紹介(7)～

当センターの名前、よく間違えられます。「生涯学習センター」「生涯教育センター」等々。正式には「生涯学習教育研究センター」です。「公開講座を行っているセンター」というイメージが強いかもしれませんが、「研究」もやっています。本NEWSLETTERのVol.3 No.4号(2007年3月)からVol.5 No.1(2008年7月)まで、当センター長・清國の研究・実践テーマの一つである「参加型学習」を紹介して参りましたが、今回からはもう一人のセンター担当教員である山本による「大学開放の歴史」に関する研究成果の一端をご紹介します。

さて、香川大学キャンパス内には、何体の胸像(日本人)があるのでしょうか? 私が今のところ気付いているのは経済学部2体、農学部1体です。(もっとあるかもしれません。) すなわち、経済学部構内の隈本繁吉(写真下)、大平正芳、農学部構内の今雪真一の各氏の胸像です。このうち、大平正芳氏は第68-69代内閣総理大臣、今雪真一氏は「南米移民の父」と呼ばれた方で、いずれも香川大学の前身校の卒業生です。

では、隈本繁吉氏は? 答えは、経済学部の前身校・高松高等商業学校の初代校長です。彼は「商工経済研究室」という組織を立ち上げ、研究と同時に各種の公開講座(に類する活動)を行いました。それについて、大正14(1925)年に次のような文章を書いています。



本校の授業開始は、昨大正十三年四月下旬に在り。…〔中略〕…爾来、僅かに半歳余に過ぎざるも、従事諸員は克く其の責に任し、講学の余暇乏しきに拘らず、商工業及経済方面より社会各般の事相に至るまで、総て之を対象として、力を材料の蒐集、分類、整理に、分担事項の調査、研究に、或は公開講演に、校外への拡張教授に、或は夏期の講習に、広告函案の展覧に致し、漸次功程の見るべきものあり。即ち本室の事業は、一面には、本校教育の内容を実際化せしむるに与りて力あると共に、他面には、学校所在地方に於ける商工業者を裨益し、延て一般文化の向上に資するの趨向なしとせず。

公開講座は大学史上比較的新しい事業と考えられがちですが、そのようなことはありません。時には歴史を紐解き、初心に帰ることも必要なのではないかと、考える次第です。
文責:山本珠美(准教授)

2. 『香川大学生涯学習教育研究センター研究報告第14号』について

当センターでは毎年度『香川大学生涯学習教育研究センター研究報告』を発行しております。生涯学習を研究する本学教員、センターが主催する講座等を担当した本学教員、また、センターが主催する講座等を担当した学外講師で編集委員会が認めた者であれば、どなたでも投稿することができます。

2008年度も担当教員に加え、センター外の4人の先生方よりご投稿頂きました。

<第14号目次>

生涯学習の推進を図るための参加型学習の方法論(3)	清國祐二(生涯学習センター)
『三十年のあゆみ』補遺～高松高等商業学校における開放事業～	山本珠美(生涯学習センター)
アンティゴネー像の解釈について	斉藤和也(経済学部)
『ロミオとジュリエット』における“passion”についての一考察	建畠正秋(元香川県立保育専門学院)
『ファウスト』におけるオイフォーリオン悲劇について	中谷博幸(教育学部)
裁判員就職禁止事由に関する一考察～なぜ、法律学の大学教授と准教授は裁判員になることができないのか?～	高倉良一(教育学部)
生涯学習教育研究センター30周年記念講演会&シンポジウム	

3. 英国ランカスター大学の生涯学習への取組(報告)

イギリス出張の折りに、ランカスター大学の生涯学習を担当する部門を訪れてインタビューを行ないました。ランカスター大学は1999-2000アカデミックイヤーに私が国際ロータリー財団の奨学金を得て、在外研究に従事した大学です。約10年ぶりの訪問でしたが、キャンパス内の建物が倍近く増え、目を見張るほどでした。研究大学・大学院としてますます充実しているようです(<http://www.lancs.ac.uk/index.htm>)。当時のスタッフも何人が在職していることもあり、アポイントメントも取りやすく、いろいろな情報を得ることができました。

イギリスでは、一般に大学の生涯学習を通じた地域貢献を担当する部門は“Department of Continuing Education”と呼ばれます。大学として学習機会を提供することを趣旨とするため、その内容はリベラルアーツ(教養)を中心とした構成となっています。受講者のターゲットが壮年期以降ということもあり、フィールドワークやグループワーク等も取り入れ、学習者の参加意識や満足度を高めるための工夫もされています。参考までに、職業教育や資格取得のための学習機会はFEカレッジと呼ばれる継続教育(“Further Education”)のための機関が主に行うという役割分担ができています。



今回、インタビューさせてもらったのは、Jo Nicholsonさんです。彼女のポジションはプログラムアドミニストレーターで、コース(講座)のアレンジをしています。インタビューで特徴的な話をかいつまんで報告することにします。ランカスター大学では昨年度まで500を越えるコースが提供されていたそうで、その大部分は外部講師によるものでした。受講者も3,000人を越えており、夏期プログラムの集中コースではイギリスのみならず、EU圏からの参加もあるそうです。特に北西イングランドという立地が、歴史や文化、遺跡等の魅力溢れるコース設定を可能としているようです。例えば、「考古学の発見」「有史前のイギリス」「山や荒野の野生生物」「鳥類学への誘い」というようなものから、「クリエイティブ・ライティング」「ドイツ語」「イタリア語」などの実用的なものまで、多彩なコースが準備されています。

しかし、今年度からは国家予算の分配状況に大きな変更があり、危機的な状況に陥っているとのこと。コースの担当を外部に依存しているため、財源不足が即コース設定の困難につながるというのです。まだ年度の間中期であり、正確な数字は出ていないのですが、コース数及び受講者数が5分の1ほどに縮小される最悪の予測もあるようです。日本の国立大学法人は、生涯学習は大学の研究及び教育を地域へ還元することで社会貢献を果たそうとしていることもあり、学内の教員が公開講座を担当することが一般的です。残念ながら大きな予算をかけて戦略的に取り組んでいる事業でもありません。イギリスと単純に比較することはできませんが、香川大学の生涯学習戦略を考える上でヒントをもらったような気がしています。

しかし、今年度からは国家予算の分配状況に大きな変更があり、危機的な状況に陥っているとのこと。コースの担当を外部に依存しているため、財源不足が即コース設定の困難につながるというのです。まだ年度の間中期であり、正確な数字は出ていないのですが、コース数及び受講者数が5分の1ほどに縮小される最悪の予測もあるようです。日本の国立大学法人は、生涯学習は大学の研究及び教育を地域へ還元することで社会貢献を果たそうとしていることもあり、学内の教員が公開講座を担当することが一般的です。残念ながら大きな予算をかけて戦略的に取り組んでいる事業でもありません。イギリスと単純に比較することはできませんが、香川大学の生涯学習戦略を考える上でヒントをもらったような気がしています。



文責:清國祐二(センター長・教授)

センター雑感

怒濤の1年間が(カレンダー的には)ようやく終わりました。センターとしては30周年という節目の年だったこと、教育・学生支援機構としては現代GP最終年度、学生支援GP初年度だったこと、そして個人としては科研の最終年度だったこと。この1年間で一体どれだけの原稿を書いたのでしょうか? ああ、でも、まだまだやり残したことが山積しています。(山本)

バックナンバーは下記のWebサイトに掲載されています。是非ご覧下さい。

Tel. 087-832-1273 Fax. 087-832-1275 URL. <http://www.kagawa-u.ac.jp/lifelong/> Email. syogse@ao.kagawa-u.ac.jp